

外で遊んでいる無邪気な子供たちの嬌声で意識が引つ張られた。ぱちりと目を開けると、途端に鋭く照り付ける一筋の太陽光が俺の目を襲った。さらなる光の猛攻を再度目を閉じて寝転がることでなんとか避ける。

さながら、敵の銃撃をローリングで華麗に躲すハリウッド映画の主人公のようだ、と妄想しながら薄暗い子供部屋で一人にやけている俺は二十四歳無職引きこもりです、こんにちは。

ところで、昨日ちゃんと窓のブラインドを閉めたはずなのになぜゆえ光が……と思い、見ると何故かブラインドに一つだけ中途半端な隙間がある。ここから光が漏れ出ていたみたいだ。こうなった原因に心当たりはある。おそらく、閉めた直後にあまりにも暇すぎて、ブラインドを指で下ろしてその隙間から悟ったような顔で遠くを睨みつける遊びを数分ほどしていたせいだが、そんな俺は平日の夜中に刑事ドラマまごっこをした二十四歳無職引きこもりです、こんにちは。

俺はため息を吐くと、ベッドから身を起こして、充電してあるスマホに目を落とす。時刻は十三時半を示していた。よし、今日も規則正しい生活が出来ている。

いつも通り、一階に降り、シャワーを浴びて、朝飯を食う。なお、お前はいつ昼飯を食ってんだ、という質問には、俺の食生活は朝飯、夕飯、夜食で完結する、と答えておく。

もう味のしなくなつた買い置きのカップ麺をもしゃもしゃと口に放り込みながら適当にテレビをつける。やっていたのはニュースだった。やはり相も変わらず、流行りのファッションやら感染症がどうか、延々と同じような内容を繰り返している。感動も驚きもない。今の俺と似ていると思つた。

←

飯が食い終われば、すぐさま拠点であるベッドに舞い戻り、スマホを眺める。まずはログインボーナスだ。

アプリを開く。「今日のログインボーナスだよ」というセリフとともにウイנקをする可愛らしいキャラクターの顔を指で連打する。そしてすぐさま、かき集めたアイテムでガチャを回した。この時ほど快感を覚えるものはない。なんならガチャを回すだけの為に入れたアプリもあるほどだ。本当にソシャゲは素晴らしい。どのくらい素晴らしいのかって言うと、この前、帰省した兄から血走つた目で「早く働け」って言われた時も、「兄ちゃん、でも俺、クリスタルとかジュエルとかオーブとか魔法石とか魔晶石とかたくさ〜んあるから、これを宝石屋さんで売れば一生遊んで暮らせるよ。だから、働く必要ないんだよ」ってキラキラとした目で言った結果、兄も頭を抱えながら「そうか」と言い、しばらく沈痛な面持ちのまま固まり、数分後にポロポロと泣き出してしまったほどだ。要するに、あの堅物な兄を感動で泣かせるほどソシャゲは素晴らしいものである。

……お、SSRが出た。やったあ。

←

ひとしきりソシャゲを遊んだ後はSNS観察だ。

トレンドをさっと見たところ、今旬なのはお国に対する愚痴と、それに対する押しつけがましい擁護のようだ。どこぞのネット記事を武器に誰かが「あれれ？これはこゝうなのに、あれがこうなっているのは矛盾していないか

い？」と皮肉し、リプ欄では「そうだそうだ！」と賛同の雄たけびを上げ、ある所では「それはメディアの印象操作だ！」と反論し、「そうだそうだ！」、またある所では「それってあなたの感想ですよ？」「そうだそうだ！」「……と何が何だかわからない宗教論争が繰り広げられている。

そんな皆々が好き勝手に自分だけの正解を主張している光景を見て、ああ、馬鹿馬鹿しいなと思いつつも、なぜか羨ましくなっている自分が腹立たしかった。

俺もこんな風に何かに傾倒出来れば、プライドを持つるのだろうか。

指がうずく。

画面に親指がくつつきかける。

……違う。こんなものでプライドを無理やり作ったところで、価値なんてない。

無職のくせに政治に関してだけ、無駄に小癪なプライドを持っている害悪人間が一人だけだ。

深呼吸する。

……右左右、よし問題ない。

プライド渦巻く危険な横断歩道を俺は早足で渡り切った。

←

次に開いたのは動画配信アプリだ。

何かを小馬鹿にするのが売りのゲーム実況者を見て、しばらく笑い転げた後、不意におすすめ欄に表示されて目についた音楽を適当に流した。

流した直後に、それが今流行りの人気曲だと気づいた。今まであまり興味を持っていなかったがどんな曲なのだろうか？

そう思い、調べた結果、俺は驚くと同時にすぐに後悔した。

もちろん再生回数一億回を優に越しているのも驚きだが、それにも増して嫌なのは、その曲を歌ったのは十八歳の女子高校生だというのだ。

コメント欄を見てみると、称賛の嵐だった。

「カッコいい！」「エモい！」「若いのに凄い！」「歌詞のこの部分はあれこれを表しているんだと思う！」「この曲、見事に俺を表現してるわ！ 例えば、俺が中学生の時……云々」などと様々なコメントがごちゃ混ぜになり、もはやカオス状態だ。

……ああ、羨ましい。

自分の好きなことが出来て、それでいて承認欲求も満たせるなんて、なんと気持ちがいいことか。

好きなことすらも見つかっていない俺とは大違いだ。そして、この歌手は十八歳という若さにして、さぞ、多くの人間から必要とされ、これからもその期待に応じただけの満足感を供給するのだろうか。

では、二十四歳という老いにして、行き場のない欲望が固まった大量の自家製まりもをゴミ箱に供給している今の俺は如何ほどの価値があるのだろうか。

生産終了した後で冷静になったからか、そんなことを思い、みじめな気分になった。

そんな気分を誤魔化すように俺は叫んだ。

「いや、俺にだって才能はある！ そう、ニートになる才能がな！」

………。

大人になれなかった「大人」がいる子供部屋に騒音が虚しく響いた。

外でカラスが鳴いた。俺はギリギリ泣いてない。

「……ねよ、俺」
何もしてないけど、疲れたから寝た。

←

起きた。スマホを見ると、もう時間は二十時に迫っていた。そろそろ親が帰ってくる。そして、またいつものように働いてくれと俺に懇願するのだろうか。まあ、だったら俺もいつものように「俺は別に生まれたくて生まれた訳じゃないのに、なんでそうやって働けたのなんなの社会的ルールを押し付けようとしてくるんだ！」という完璧な反論を使用するだけだ。

結果、できちゃった婚をした親は何も言うことが出来ず、いつものようにめそめそと泣くだけの機械になる。

俺はその間、自身を襲う罪悪感に耐えれば良いだけだ。そう、いわばこれはニートでいる為の仕事なのだ。

親を悲しませることの罪悪感から耐えて、無神経でいられれば、報酬として三食飯付き無限泊旅館に泊まれる、そういう変わったバイトと捉えれば良いのだ。

そう考えたなら、なんだか誇らしくなってきた。

今度から誰かに「あなたの職業はなんですか？」と聞かれたら仁王立ちしながら腕を組んで、自信満々に「ニート、やってます！」と答えることにしよう。

……など強がれば強がるほど、俺の気分は落ち込んでいく。

……自分でも分かっているんだ。心の底からこんな天気でも無責任なことを思っているわけではないって。

この悲惨な状況を打開するのは簡単なことだ。

明日にでも外出して、バイトの面接を手当たり次第に受けていけばいいか、こんな俺でも許してくれるよう

な働き口が見つかるはずだ。

そうすれば俺は「無職引きこもりのニート」から晴れて、「居候しているフリーター」に格上げだ。

そう、たったほんの少し、変わればいい。

でも、そのほんの少しが、どうしようもなく、怖い。

いつからだろう、他人の目を異常に気にするようになったのは。

中学時代、自分の好きだった趣味を勝手にそれは恥ずかしいものだと思ひ込み、無理して嫌いになったことも。

高校時代、仲の良かった友人を気にしすぎるあまり、些細なことで勝手に嫌われたと思ひ込み、自分が傷つく前にと、突き放して失ったことも。

大学時代、その自由奔放を良しとする環境に馴染めず、勝手に俺は負け組だと思ひ込み、他ならぬ自分に失望して途中から行かなくなったことも。

そして今、外出してしまつたら、道行く人全員から蔑まれ笑われてしまつと勝手に思ひ込んでいることも。

俺は拳を握りこんだ。

……いや、違う。思ひ込もうとしているのだ。

変わるのが怖いから、口実を作ろうとしているのだ。もっとうんざりだ。

ニュースを見ても、ソシャゲをしても、SNSを覗いても、動画アプリを見ても、それがすべて自責になって帰ってくるのは。

変われ。

変わりたい。

変わらなきや。

変わるろう。

明日、バイトの面接を受けよう。

←

あの後、興奮しすぎたせいで全然寝られなかった。

てか、バイトの面接ってそんなに簡単に受けられないんだな。その前にウェブで色々手続きとかしなきゃいけないし、結構めんど……って、いかんいかん！せつかくあれだけ思い切り決意したんだ！

この程度で挫けてたまるか！

こんなネガティブな考えになるのも疲れているからだ。とりあえず、寝て、気力を回復させよう。

←

……今は何時だ。あれ、もう夕方じゃん。

とりあえず、ウェブでバイト募集を……。

このご時世だからか、全然、募集してねえな。

えーっと、なにになに？引越越し、土木工事……いやいや、引きこもっててロクに運動してない俺ができるわけないじゃん。

あとは……コンビニ、スーパー……いやいや、引きこもって、はや三年になる俺が他人とコミュニケーションなんてできるわけないじゃん。

……ライターねえ、……普通につまんなそう、却下。

……もうなくなっちゃった。

つーか、よく考えればバイトなんてしたところで稼げる金なんてたかが知れている。

どうせ親のすねをかじるんだつたら、潔く余すところなくかじり尽くすべきた。

しかも俺なんかバイトなんて始めちゃつたら、途端に傲慢になりそうだし。

無駄に少し努力してるせいで、親に対して「俺はバイトしてやっているとんだぞ、感謝しろ」って、急に上から目線になって、そして、だんだんとエスカレートして、

ついにはDV……うわ、怖い。

そんなことになるんだつたら働かないほうがマシじゃん。

そもそも昨日の俺は少しおかしかったんだ。

なんだよ、変わるう変わるうって。誰だつて変われたら苦労しねえよ。

深夜テンションに任せて自分に酔い過ぎたら、気持ち悪い。

あーあ、下らない。

結局のところ、俺は単純に怠惰以外の才能が何もかもないってだけの話なんだよな。

そんなの運ゲー、ガチャじゃん、どうしようもない。

こんな即刻売却されるレアティNのような人生じゃまともに生きていけないわ。

現世は諦めたけど次、もし生まれてくるなら、才能あふれたSSRで頼んだ。

よろしく、神様。

↑